九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中世西欧の夢幻視物語に見る人間の肉体と霊魂の中世的・聖書的な基本概念についての一考察

壬生, 正博
福岡歯科大学 : 教授

https://doi.org/10.15017/26547

出版情報：地域健康文化学論輯. 5, pp.1-11, 2011-09-30. 地域健康文化学会
バージョン：
権利関係：

中世西欧の夢幻視物語に見る人間の肉体と霊魂の中世的・聖書的な基本概念についての一考察*

壬生　正博

序論

中世西欧の夢幻視物語のひとつの特徴は、夢幻視者の霊魂が肉体を離れて異界を訪れることである。霊魂が異界で様々な体験をしている間、肉体は睡眠状態、仮死状態もしくはトランス状態になっており、呼吸を除く肉体の活動が一時的に休止している。夢幻視物語のラテン語原典からの現代英語訳を参照して、12 世紀の作品からいくつか例を挙げると、*The Vision of Tundale* には夢幻視者の仮死状態に陥った様子が"He [主人公 Tundale] said that when his soul left his body, and he knew he was dead, knowing he was guilty he grew terrified, and he did not know what he might do."[1]（下線は筆者）と描写されており、*The Revelation of the Monk of Eynsham* には、エインシャムの修道士が幻視の中で神に"the condition of souls released from the body"[2]（下線は筆者）について教示してもらうことを懇願する。これらの例においては、"body"を離れるのは"soul"である。一方、同じく 12 世紀の作品 *St. Patrick's Purgatory* では、大司教たちが騎士 Owein に"If, however, you lead a good and religious life, you may rely on coming to us again when your spirit is released from the body."[3]（下線は筆者）と諭し、そして 13 世紀初頭の *The Vision of Thurkel* を見ると、St. Julian が主人公 Thurkel の夢に現れて"Let your body rest on the bed. It is only your spirit that is to go with me."[4]（下線は筆者）と述べており、これらの例では、"body"を離れるのは"spirit"である。

これらの記述から、人間は肉体（body）の他に霊魂（spirit あるいは soul）から成る存在であることがわかる。この点から、我々は肉体と霊魂は死や夢幻視によって分離することを前提に夢幻視物語を読むべきであろう。換言すれば、夢幻視物語の背後には霊魂不滅の観念が潜んでいるのである。このような視点に立ち、小論では、中世西欧の夢幻視物語をより深く理解するために、霊魂や肉体に関する中世的あるいは聖書的な基本概念を考察する。

---

*小論は、『比較思想論輯――比較思想学会福岡支部――』（第 14 号）に掲載された拙論「魂が赴く場所――中世の夢幻視文学における異界描写を聖書思想の潮流にたどる――の中の「II. 人間――肉体と霊魂」(pp. 64－68）に焦点をあてて再考したものである。

1) Eileen Gardiner, ed., *Visions of Heaven & Hell before Dante* (New York: Italica Press, 1989), p. 152 を参照。

2) Gardiner, p. 200 を参照。

3) Gardiner, p. 146 を参照。

4) Gardiner, p. 220 を参照。

Ⅰ. 物語中の"soul"と"spirit"の使用状況

小論で扱う中世西欧の夢幻視物語の原典はラテン語であるが、便宜上、Gardiner の現代英語訳を用いる。諸作品を見ると、肉体についてはほぼ"body"が使用されるが、霊魂については"soul"と"spirit"の両方の言葉が混在している。そこで、後者ふたつの言葉（"soul"と"spirit"）が諸作品の中でどのように使用されているか、その状況を調査した一覧表を呈示したい。ここでは煩雑さを避けるために、主人公あるいは異界にいる人々を主な調査対象として取り上げ、天使や悪魔等の人間以外の超自然的存在は除外したことをことわっておく。一覧表の呈示に先立って、便宜上、以下のように創作時代に分けて、それぞれの物語あるいは登場人物に番号を付けた。

6 世紀後期頃
Gregory the Great の *Dialogues* から－
①修道士 Peter
②貴人 Stephen
③ある一人の兵士（a certain soldier）
Gregory of Tours の *History of the Franks* から－
④St. Salvius
8 世紀前半頃
尊者 Bede の *Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum* から－
⑤聖人 Furseus
⑥敬虔な善人 Drythelm
9 世紀頃
⑦*Wetti's Vision*
⑧*Charles the Fat's Vision*
12 世紀
⑨*St. Patrick's Purgatory*
⑩*The Vision of Tundale*
⑪*The Revelation of the Monk of Eynsham*
13 世紀
⑫*The Vision of Thurkel*

人間の"soul"と"spirit"の使用状況一覧表

人物・物語の番号	soul	spirit	特記事項
①	―	―	Peter の物語は短いためか、"soul"と"spirit"は記述されていない.
②	○	―	Stephen についてのみ"soul"が使用されている.
③	○	―	一人の兵士の"soul"である.
④	―	○	St. Salvius の"spirit"である.
⑤	○	―	Furseus と異界にいる者に対して"soul"が使われている.

⑥	○	―	異界にいる人々に対しては"soul"が使用されているが、Drythelm にはこの語は使われていない.
⑦	○	○	本作品では、両方の語が使用されているが、"soul"の使用例が目立つ.
⑧	○	○	Charles に対して両方とも使われているが、異界にいる人々には"souls"が使用されている.
⑨	○	○	両者は騎士 Owein に対して使われている．異界にいる人々にはどちらも使用されていない.
⑩	○	○	両者は Tundale に対して使われている．異界にいる人々には"souls"が使用されている.
⑪	○	○	両者は Eynsham に対して使われている．異界にいる人々にも両者が使用されている.
⑫	○	○	本作品では Thurkel に対して"spirit"が使用されている．異界にいる人々には両者が使用されているが、"spirit(s)"の使用例が多い.

この一覧表を見ると、"soul"の方が"spirit"よりも使用されているのがわかるが、前者が優位に多いとは一概には言い難い。つまり、この表を見る限り、人間の霊魂を表す"soul"と"spirit"は、明確には区別されていないと判断すべきであろう。むしろ、両者は混同されていると言うべきかもしれない。両者が混合的に使用されている例をいくつか挙げると、*Charles the Fat's Vision* に記された"my guide saw my (= Charles') soul thus terrified"（下線は筆者）[5] と"my (= Charles') spirit returned to my body"（下線は筆者）[6] では、"soul"と"spirit"はどちらも Charles の魂を示している。また、*The Vision of Tundale* の一節："his (= Tundale's) body immediately sank to the ground, separated from his soul; and his spirit was no longer of any account there"（下線は筆者）、[7] あるいは"After Tundale's soul watched this horrible and fearful spectacle for a long time, at the same time both destitute before the great terror and in fear for his spirit, he said sobbing to the angel...."（下線は筆者）[8] でも、"soul"と"spirit"が同一人物に使われている。ただし、注意すべき点は、他界して異界にいる他の人々が必ずしも"soul"や"spirit"で表現されるわけではない事である。この点は、例えば、*St. Patrick's Purgatory* には、"people of both sexes and of every age"、[9] "human beings of both sexes, and all ranks and ages"、[10] "a large multitude of men and women"[11] 等の例からもわかる。

以上の諸点を念頭に置き、以下では、夢幻視物語に不可欠な肉体（body）と霊魂（soul, spirit）の中世的な基本概念について、中英語研究の権威ある大辞典 *Middle English Dictionary*（以下、*MED* と略記）[12]の語義解説を拠り所としつつ、聖書の概念との比較検討を行う。この目的は、夢幻視物語の背景を探求することである。

---

[5] Gardiner, p. 132 を参照。
[6] Gardiner, p. 133 を参照。
[7] Gardiner, p. 151 を参照。
[8] Gardiner, p. 159 を参照。
[9] Gardiner, p. 139 を参照。
[10] Gardiner, p. 141 を参照。
[11] Gardiner, p. 144 を参照。
[12] Robert E. Lewis, editor in chief, *Middle English Dictionary* (Michigan: The University of Michigan Press, 1989).

II.　人間の肉体と霊魂について

１．人間の肉体について

MED の"bodi" n.の中で、"soul"と"spirit"との関連から重要なのは、以下の語義である。

> 2.(a) The physical part or aspect of a living being as distinct from its spiritual or mental part or aspect;

この語義では、人間の肉体とは、霊的・精神的な部分とは異なる物理的な部分を指している。つまり、その背後にある肉体と霊魂を区別する概念を知ることができる。しかし、この *MED* の語義解説には、肉体が「最後の審判」や「復活」といったキリスト教思想との関わりには言及されていない点に気がつく。

それでは、聖書では人間の肉体についてどのように記されているだろうか。これは、神による人間創造と関連するので、まず、聖書が記す人類の始祖の創造箇所を見ることにする。現代英語訳聖書 *Holy Bible, New International Version*[13] によれば、神は人間の肉体を地面の「土塊」（dust）から創り、神がこの土塊の鼻から「生命の息」を吹き込んだ後に、生きた人間が誕生したのである（Gen. 2:7）。このことから、人間の肉体は土に帰すものであり、一方、息は神に帰するものであることがわかる。*New International Bible Dictionary* の"body"の項には、以下のように新約聖書の観点に立つ興味深い解説がみられる。

> As there is a physical body for this life, so there is <u>a spiritual body</u> for the life of the age to come after the <u>resurrection</u> (1 Cor 15:38 ff.). The present body, which is affected by sin, will be replaced by a body whose nature is spirit and which is pure and glorious—like Christ's resurrection body.[14]（下線は筆者）

この解説から、肉体は死後に土に還るが、復活の後に新たな「霊的な肉体」(spiritual body) が生じることがわかる。それ故に、肉体は土に還れば無になるというわけではなく、復活することによって霊的になるのである。つまり、肉体と霊魂は一体であり、この点で、肉体にも永遠性が備わっていると理解できる。[15] 人間の肉体に関するこのような捉え方は、先述した*MED* の解説には含まれていないが、夢幻視物語における人間の肉体の捉え方は、上記のキリスト教的な考え方が基底になっている。つまり、夢幻視物語の異界にいる者たちの肉体は、最後の審判の日まで土塊の状態である。

２．人間の霊魂――SOULとSPIRITについて

（１）SOUL について

---

[13] *Holy Bible, New International Version Containing The Old Testament and The New Testament* (Michigan: Zondervan Publishing House, 1988).なお、本稿における聖書の引用はこの聖書からである。

[14] J. D. Douglas & Merril C. Tenney, ed. *New International Bible Dictionar*y (Michigan: Zondervan, 1987), p. 168 を参照。

[15] St. Augustine は、復活した肉体は"incorruptible"という考えを持っていた。この点に関しては Jeffrey Burton Russell, *A History of Heaven* (New Jersey: Princeton University Press, 1997), p. 87 を参照。

まず、*MED* から"soul(e" n.の中で本研究と関連があると思われる語義を以下に挙げる。

1a. The spiritual and rational element in man, the Christian soul, understood:
(a) to animate and control the body;
(b) to have an eternal destiny as a moral agent...;
(c) to be engaged in a moral struggle with the body;

この語義は、キリスト教の概念から派生したものであろう。この概念は (a) ～ (c) に細分化されているが、まず、(a) は"soul"が人間の肉体を生かす生命力であることを示している。(b) は道徳・倫理と関連する。語義中の"eternal destiny"は、"soul"が永遠性を持つ点に言及しており、夢幻視物語に記された最後の審判との関連があると思われる。そして、(c) は、やはり道徳との関連が説明されているが、ここでは"soul"と"body"の道徳的な葛藤のことである。

次の語義も本研究にとって重要である。

2. (a) The disembodied spirit of a dead person between death and doomsday
(b) the soul of a person transported in an ecstasy

まず、(a) では、「死」と「最後の審判の日」の間にいる「肉体から離脱した死者の魂」に言及している。そして、この解説中の"death"とは、単に肉体の死ではなく、最後の審判によって罪人が受けるべき永遠の死である。つまり、この (a) の語義を夢幻視物語にあてはめれば、煉獄にいる霊魂たちのことであると思われる。そして、語義の中に"spirit"の語が使用されているのは、やはり、"soul"と"spirit"が同義である点を示していると考えられる。(b) に関しては、「恍惚」の状態になった人物の霊魂に言及している。この状態は、夢幻視物語の主人公が異界を訪れるきっかけとなる「仮死状態」に酷似している。

一方、聖書では、"soul"はどのような位置づけがなされているのであろうか。英語の"soul"に相当するヘブライ語"*nefesh*" は、「息」(breath) の意味をもち、これ以外に、"*neshamah*"（あるいは"*nishamaha*"）という語が使用される。[16] これは、古代人が「息をすること」が生きている証であると考えていたことを示している。これらの語は、人類の始祖 (Adam) の創造場面（Gen. 2:7）にも使用されている。つまり、神が土塊に吹き込んだ息は"*nefesh*"であり、息を吹き込まれた土塊が生きる者となったのが"*neshamah*"なのである。[17] 他に、"*nefesh*"には"life"の意味があり、更に"(h)ere the soul is a kind of material principle of vitality, which is separable from the inert substance (*basar*) of the body."[18] という解説から、ヘブライ語の"*nefesh*" は肉体を動かす活力であることがわかる。一方、"*neshamah*" は、"sometimes refers particularly to conscious life or intelligence"[19] という意味も含み、人間の知的活動との関連もある。しかし、いずれにしても旧約聖書においては、"soul"と"body"

---

16) "SOUL: JEWISH CONCEPT," *Encyclopedia of Religion*, 2nd ed. (New York: Thomson Gale, 2005) を参照。
17) "Soul: Jewish Concepts," *Encyclopedia of Religion*, vol. 12, p. 8556 を参照。
18) "Soul: Jewish Concepts," *Encyclopedia of Religion*, vol. 12, p. 8556 を参照。
19) "Soul: Jewish Concepts," *Encyclopedia of Religion*, vol. 12, p. 8556 を参照。

を分ける「二分法」（dichotomy）は見られない。[20] 一方、新約聖書では、ヘレニズム思想の影響を受けて、"body"と"soul"を対比する思想が生じる。[21] 例えば、*Matthew*では、"Do not be afraid of those who kill the body but cannot kill the soul"（Mt.10:28）（下線部は筆者）という箇所からわかるように、"body"と"soul"を対比させて、後者の「永遠性」に言及している。また、新約聖書では、"soul"に相当する語としてギリシア語"*pshuchē*" が用いられており、[22] この語は「生命の原理、本源」（the principle of life）[23] を意味している。

そして、*New International Bible Dictionary* の"soul"の解説を見ると、天界にいる祝福された死者が殉教者として言及される場合に、その魂は"souls"と呼ばれ、生前の肉体の経験に言及されない場合、その魂は"spirits"と呼ばれるとある。しかし、"(t)hese functional names...often overlap"[24] という解説から、両者は重複して用いられることがわかる。そして、以下のように人間の本質的実体を構成する二分法が呈示されている。

(1) the body, which at death returns to dust, awaiting the resurrection
(2) the nonmaterial self, which if regenerate goes to paradise or heaven; if not, to the abode of the wicked dead[25]

上記（1）に見られる肉体の復活（resurrection）については後述するが、肉体は最後の審判の日と関連を持ち、この審判の後に Paul が記す「霊的な肉体」（spiritual body, 1 Cor 15:44, etc.）となると見なしてよいであろう。次に（2）の解説にある「非物質的な自己」（nonmaterial self）とは、"soul"と"spirit"のことであり、これらは霊的に新生するとパラダイスや天界へ赴き、それ以外の魂は、邪悪な死者たちの世界へ堕ちることになる。つまり、肉体の行動によって生じる「善」や「悪」は、つまるところ"soul"と"spirit"が肉体を通じて行うのであり、「善」や「悪」に対する報酬や報いは、肉体ではなく、"soul"と"spirit"に向けられるのである。

ここで、13 世紀の大神学者である Thomas Aquinas の"soul"に関する見解に言及しておきたい。

> In the thirteenth century, Thomas Aquinas follows the doctrine of the soul presented in Aristotle's *Eudemus*, teaching that, while body and soul together constitute a unity, the soul, as the "form" of the body, is an individual "spiritual substance" and as such is capable of leading a separate existence after the death of the body.[26]

---

[20] "SOUL (IN THE BIBLE)," *New Catholic Encyclopedia*, 2nd ed. (Detroit: Thomson Gale, 2003), vol. 13, p. 336 を参照。
[21] "SOUL (IN THE BIBLE)," *New Catholic Encyclopedia*, vol. 13, p. 336 を参照。
[22] "SOUL: CHRISTIAN CONCEPT," *Encyclopedia of Religion*, vol. 12, p. 8561 を参照。
[23] "SOUL (IN THE BIBLE)," *New Catholic Encyclopedia*, vol. 13, p. 336 を参照。
[24] "SOUL," *New International Bible Dictionary* (Michigan: Zondervan, 1987), p.959 ならびに "SPIRIT (IN THE BIBLE)," *New Catholic Encyclopedia*, vol. 13, p. 425 を参照。
[25] "SOUL," *New International Bible Dictionary*, p.959 を参照。
[26] "Soul: Christian Concepts," *Encyclopedia of Religion*, vol. 12, p. 8564 を参照。

このように Aquinas は、Aristotle の思想を継承しながら、"soul"は"body"が死んだ後も存在する「霊的実体」（spiritual substance）であるという見解を持っていた。このような思想は、異界夢幻視物語にも該当する。

（２）SPIRIT について

次に"spirit"について考察する。まず中世的な語義を把握するために *MED* の"spirit" n. から、本研究にとって重要と思われる語義を取り上げる。

> 1. (a) Life, the principle of life; vital breath, a vital breath; also, the principle of animation, soul; also, a giver of life [quot. a1425 (a1400)]

この語義からわかるように、"spirit"は生命、生命の本質（原理）、そして、「息」でもある。特に注目すべきは、解説中に"soul"の語が使用されており、やはり両者に互換性があることを如実に示している。しかし、"spirit"には、"soul"とは異なり、肉体との関連や、最後の審判を想起させる道徳や倫理と関連を持つ性質には言及されていない。

次に聖書思想における"spirit"の概念を見ると、旧約聖書では、英語の"spirit"に訳されるヘブライ語は"*rûaḥ*"で、ギリシア語では"*pneuma*" が使用される。これらは「風」、あるいは生命を意味する「息」の語義をもつ。[27] この「息」という点では、"spirit"と"soul"は共通概念をもち、両者ともやはり人間の「生命」と深い関係にあることを示している。そして、"spirit"が人間の肉体と対比されると、"Man...is flesh, weak and perishable, while spirit is divine, strong, and enduring"[28] という解説からわかるように、"spirit"は明らかに神聖で不朽の性質を備えている。

中世における夢幻視物語のように、死後の"spirit"が異界にいるという思想の基礎になるのは、ユダヤ教の後期、即ち、キリスト教時代に先立つ二世紀に、ペルシアやギリシアの影響を受けた時代だと思われる。特に、黙示文書の *1 Enoch* （22.3-13）には、他界した者たちは"the spirits of the dead"[29] と述べられており、やはり *1 Enoch* のような黙示文書は、本研究にとって重要な文書であることを再認識できる。

旧約聖書では、例えば、*Psalm* には、"When their spirit departs, they return to the ground" (Ps. 146:4) と記されており 、あるいは *Ecclesiastes* では"and the dust returns to the ground it came from, and the spirit returns to God who gave it"（Eccles. 12:7）という記述が見られる。これらの箇所は、肉体と霊魂がそれぞれに還る場所を記している。つまり、肉体は土に還り、霊魂は神のところに還るのである。

新約聖書に目を移すと、例えば、*Luke* に以下の一節が見られる。

> [53]They laughed at him, knowing that <u>she was dead</u>. [54]But he took her by the hand and said, "My child, get up!" [55]<u>Her spirit returned</u>, and at once she stood up. Then Jesus told them to give her something to eat. (Lk. 8:53-55)（下線は筆者）

---

27) "SPIRIT (IN THE BIBLE)," *New Catholic Encyclopedia*, vol. 13, p.424 を参照。
28) "SPIRIT (IN THE BIBLE)," *New Catholic Encyclopedia*, vol. 13, p. 424 を参照。
29) "SPIRIT (IN THE BIBLE)," *New Catholic Encyclopedia*, vol. 13, p.425 を参照。

上記のように他界した人物の"spirit"は、一度離れた肉体へ戻ることで息を吹き返した。これは、夢幻視物語において、主人公が仮死状態に陥り、一時的に肉体から離れて、再び肉体に戻るという設定に酷似している。また、"(Christ) went and preached to the spirits in prison who disobeyed long ago when God waited patiently in the days of Noah while the ark was being built."（1Pt. 3:19-20）という一節では、Jesus が十字架の上で死んだ後に死者たちの魂が捕らえられた地下牢へ降りて、福音を述べ伝えたことについて言及されている。この一節の内容は、夢幻視物語において、罪人たちが陰鬱な世界で苦しんでいる様子を想起させる。そして、"the spirits of righteous men made perfect"（Heb.12:23）は、天のエルサレム（Heb.12:22）の中で、神、Jesus、そして天使たちとともに生きるのである。やはり、この点も夢幻視物語と聖書の記述との共通性を想起させる。

上記の旧約あるいは新約の諸例から、肉体と霊魂は極めて密接な関係を持っているが、"spirit"はその創主より発し、人間世界あるいは肉体に宿り、そして再び創主に帰還する性質をもっている点が理解できる。

以上の考察から、"body"は、それに活力を与える"soul"や"spirit"によって生きていると言えよう。そして、これらが"body"から抜け出してしまうと、"body"は単に土塊の存在でしかなくなる。そして、最後の審判の時まで地下の世界に留まることになる。一方、"soul"は、人類の始祖が生きた存在となるのに必要な要素である。つまり、"body"の中に神の息（soul）が吹き込まれた故に"body"は生きているのである。従って、"body"と"soul"は、極めて結びつきが強い。そして、"soul"と類似する意味を持つ"spirit"は、やはり、"body"を生かす原動力であり、この機能の故に"soul"と"spirit"は、時に重複して用いられる。この点は神学者 Wyne Grudem の以下の見解からも、この両者が人間の霊魂を示していることがわかる。

> Death is a temporary cessation of bodily life and a separation of the soul from the body. Once a believer has died, though his or her physical body remains on the earth and is buried, at the moment of death <u>the soul (or spirit) of that believer</u> goes immediately into the presence of God with rejoicing.[30]（下線は筆者）

以上のように、夢幻視物語における肉体や霊魂の観念を把握するには、*MED* の語義解説に加えて、やはり、聖書の観念を比較検討する必要があることが理解できる。そうすることで、夢幻視物語に描かれた異界の観念をより深く探求できるのではあるまいか。

ところで、夢幻視物語の中英語版には、"soul"や"spirit"の他に"ghost"の語も使用されている点は注意すべきであろう。この点について中世的な概念に絞って若干の考察を試みる。

３．GHOST について

夢幻視物語の中英語による翻訳作品を見ると、上に述べた"soul"や"spirit"という語と共通する概念を持つ"ghost"という語がある。例えば、中英語翻訳テクストには、「霊魂がふたたび肉体に戻ってきた」("The goste come a□eyn to □e body")、[31]「邪悪な霊たち」("Wykked

---

[30] Wayne Grudem, *Systematic Theology: an Introduction to Biblical Doctrine* (Grand Rapids, MI: Zondervan, 1994), p. 816 を参照。

[31] Rodney Mearns, ed. *The Vision of Tundale* (Heidelberg: Carl Winter・Universitätsverlag, 1985), p.

gostes"）[32] 等の例がある。諸作品における"ghost"の使用頻度は"soul"や"spirit"ほど高くはないが、無視できない重要な語彙である。そこで、*MED* の"gost" n.を参照して、特に人間と関連を持つ"ghost"の語義を挙げると以下のとおりである。

3. (a) The soul of man, spiritual nature;
the soul as distinguished from mind, the emotional nature;
the life principle in man;

このはじめの語義を見ると、"ghost"には"soul"と"spirit"の両方の意味をもっていることがわかる。二番目の語義は、"ghost"の情緒的な側面が説明されている。この解説では、"soul"が使用されているが、"spirit"にも人間の感情を表す概念もある。[33] そして、三番目の解説から、"ghost"は人間の生命原理であり、この点では、"soul"と"spirit"と同じ概念を持っていると理解できる。これらの諸点から、中英語作品に記される"ghost"は、異界にいる夢幻視者の魂や他界した魂たちを表す"soul"や"spirit"と同一視することが可能であろう。

次に、夢幻視物語でも言及される復活の概念について述べる。

４．復活について

復活思想は、夢幻視物語の背後にある概念ではあるが、物語の主要テーマとは言えないので、ここでは復活思想の基本概念のみ捉えておきたい。

この復活思想は、ユダヤ教のドグマを基にキリスト教へ引き継がれた教義である。[34] すべての死者は、暗黒の場所であるシェオル（Sheol）で永遠に眠ると考えられていたが、その一方で、大預言書のひとつ *Isaiah* には、死者の復活の様子が以下のように述べられている。

But your dead will live;
their bodies will rise.
You who dwell in the dust,
wake up and shout for joy.
Your dew is like the dew of the morning;
the earth will give birth to her dead. (Isa. 26:19)

このように復活思想とは、主に死後の肉体に関する教義である。先に述べた"soul"と"spirit"は神のもとに帰還したり、パラダイスや天界へ赴くと述べたが、やはり"soul"と"spirit"は、肉体がないと不完全な存在なのである。従って、肉体の復活があって完全な個としての人間が成立することになる。そして、旧約時代後期の黙示文書の時代（紀元前 2 世紀から紀

---

84 を参照。

[32] *St Patrick's Purgatory*, ed. Robert Easting (Oxford: Oxford UP, 1991) EETS 298, p. 50 を参照。なお、Yale Version でも"Wykkyd gostys" (Easting, *St Patrick's Purgatory*, p. 51.)となっており、ほぼ同じ表現が使用されている。

[33] "SPIRIT (IN THE BIBLE)," *New Catholic Encyclopedia*, vol. 13, p. 424 を参照。

[34] "Soul: Jewish Concepts," *Encyclopedia of Religion*, vol. 12, p. 8557 を参照。

元 2 世紀頃）になると、死者に永遠の生命が授けられるという終末思想がでてくる。[35]この思想は、特に *Daniel* の中の"Multitudes who sleep in the dust of the earth will awake: some to everlasting life, others to same and everlasting contempt"（Dan. 12:1-2）に語られており、死はすべての死者を飲み込み無にするのではなく、神に忠実であった者たちには復活後に永遠の生命が与えられ、背教者たちには永遠の死が待つという思想が生じた。こうして正しき者たちの霊魂が行き着く場所は、神が住む聖なる天界と結びつきを強めることになる。

新約聖書では、例えば、Paul の場合は、人類の始祖 Adam は「死」をもたらし、Jesus Christ は「生」をもたらした（1 Cor.15:20-24）という立場から、復活思想を支持・擁護している（Act. 17:8, 17:32, 23:6, etc.）。何故なら、Paul は、Jesus の復活を彼の教義の根底に据えているからである。[36] Paul は、人間の肉体には地上の肉体（あるいは自然の肉体）と天上の肉体（あるいは霊的な肉体）があると考えた（1 Cor.15:44-47）。そして彼によれば、「神の国」（kingdom of God）は肉や血では受け継ぐことはできない（1 Cor.15:50）。つまり、朽ち果てる性質のもの（物質的な人間）が朽ちないもの（神の国）を継ぐことはできないのである。何故なら、霊的な肉体があってこそ人間は完全体となり、神の国を継ぐ資格ができるからである。そして、人間が朽ち果てないものへの変容は、最後のラッパの音と同時に達成されると Paul は述べている（1Cor.15:51-53）。

肉体の復活については、中世の夢幻視物語に多大の影響を与えた 4 世紀後半の新約聖書外典 *Apocalypse of Paul* にも説かれており、この文書によれば、肉体を離れた霊魂は復活の日に再び肉体に戻らねばならない。[37]しかし、このような見解とは異なり、1 世紀後半の旧約聖書偽典のひとつで、やはり夢幻視物語に影響を与えた *2 Esdras* に見られるように、肉体を「霊魂の牢獄」とみなし、肉体を霊魂の下位に置く思想があることにも注意を喚起すべきであろう。[38] この *2 Esdras* によれば、人間は永遠の霊魂を保有し、神の審判の日には霊魂のみが復活する。また、初期キリスト教の神学者 Origen も"soul"は"body"という牢獄に捕らえられているという見解を述べているが、その一方で、輪廻思想（reincarnationism）も説いているのは注目すべき点であろう。[39]

以上のように、復活とは主に肉体の復活を指すが、肉体は神による最後の審判の日まで土塊の状態で地下に待機している。従って、肉体は地下で朽ち果てることはない。何故なら、人間は肉体と魂があって初めて完全な存在となるからである。そして、Paul の復活思想で見たように、肉体の復活は、地上ではなく天界で行わることで、霊的な肉体が復活する。これによって肉体は「不死」となる。つまり、天界は人間が新たな命を得る特別な場所なのである。夢幻視物語に語られる天界もやはりこのような場所（あるいは物語の舞台）として把握すべきであろう。

---

35) "RESURRECTION OT THE DEAD" *New Catholic Encyclopedia*, vol. 12, pp.169－170 ならびに "Life, Eternal," *Encyclopedia of Christian Theology* (New York: Routledge, 2005), vol. 2, p. 922 を参照。
36) "RESURRECTION OT THE DEAD" *New Catholic Encyclopedia*, vol. 12, p.171 を参照。
37) Gardiner, p. 20 を参照。
38) Willis Barnstone, ed. *The Other Bible* (New York: Harper San Francisco, 2005), p. 513 を参照。
39) "Soul: Christian Concepts," *Encyclopedia of Religion*, vol. 12, p. 8564 を参照。

結語

小論では、夢幻視物語に描かれる肉体や霊魂の観念について、中英語辞典（*MED*）の語義解説のみならず聖書思想にも言及することによって考察した。この試みから、*MED* の語義解説はキリスト教思想と対比することで、より深遠な意味を理解し得たのではあるまいか。特に注目すべきは、キリスト教の観念では、肉体と霊魂は死を境として一時的に分かれるが、最後の審判における復活によって両者は再び合一して最終的な一個体となる点である。また、夢幻視物語でほぼ同一視されている"soul"と"spirit"は、聖書においてもやはり同一視されている側面があることがわかった。従って、夢幻視物語は、やはり、聖書思想の観念を基底として創作された背景が一層明らかになったと言えよう。

[A Study on Medieval and Biblical Concepts of Human Bodies, Souls and Spirits in Medieval Dream-Visions]

[MIBU Masahiro・福岡歯科大学教授・イギリス文学・比較思想]